

「総合的な学習の時間」の指導の在り方と望ましい評価等に関する調査研究

愛知県立名古屋養護学校

1 はじめに

(1) 本校の概要

愛知県立名古屋養護学校は、名古屋市西区、北区、中区、中村区、東区の5区と清須市、西春日井郡西春町、春日町の1市2町を校区とする肢体不自由児のための養護学校である。昭和31年4月に愛知県内で初めての養護学校として設立され、今年度開校50年目を迎える。小学校、中学校、高等学校に準ずる教育課程での学習のほかに自立活動の学習などを行っている。自立活動を通して身体機能の改善や健康の保持を図るとともに、障害を克服する姿勢を育てている。現在は、小学部96人、中学部51人、高等部50人、合計197人の児童生徒が在籍しており、隣接する愛知県青い鳥医療福祉センター（以下「センター」と称す）に入所している児童生徒も通学している。

< 表 1 全校児童生徒数 (平成17年9月1日現在) >

部	学級数等		通学		訪問	計
			自宅	センター		
小学部	通常の学級	7	21	11		32
	重複障害学級	23	45	15		60
	訪問	2			4	4
	計	32	66	26	4	96
中学部	通常の学級	4	11	7		18
	重複障害学級	11	22	8		30
	訪問	1			3	3
	計	16	33	15	3	51
高等部	通常の学級	6	35	4		39
	重複障害学級	3	4	4		8
	訪問	1			3	3
	計	10	39	8	3	50
合計		58	138	49	10	197

< 表 2 病類別児童生徒数 (平成17年9月1日現在) >

	脳性疾患	脊椎脊髄疾患	筋原性疾患	骨関節疾患	その他	計
小学部	77	1	5	1	12	96
中学部	32	5	7		7	51
高等部	41		4		5	50
合計	156	6	16	1	24	197

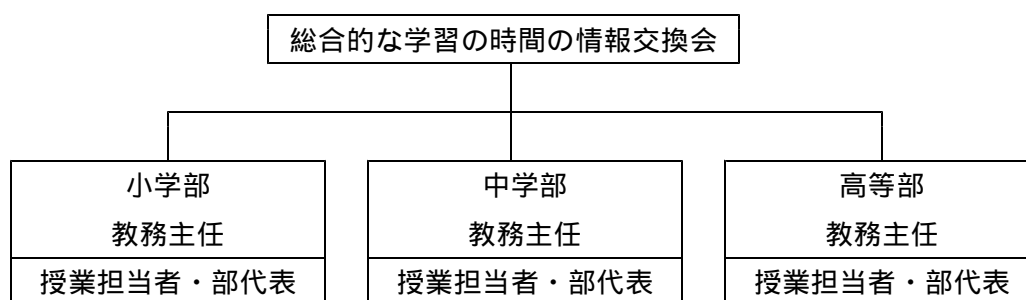
(2) 研究のねらい

本校児童生徒は、日常会話程度のやり取りが成立する者でも移動手段として車いすを日常的に使用し、学校と家庭あるいは「センター」との限られた生活を送っている場合が多い。したがって、生活場面に広がりやが少なく、教師や家族以外の人とかかわる機会も少ないのが現状である。そこで、総合的な学習の時間を通して「生きる力」（人とかかわる力や支えられる力）をはぐくむことを目指したいと考えた。また、「特色ある学校づくり」についても、総合的な学習の時間は、重要な役割を担っている。決まった教科書もなく、指導者の力量が問われるからである。そこで、肢体不自由養護学校における総合的な学習の時間について、目標に応じた計画、実施、評価のサイクルを確立することは教育内容の質的向上を図ることにもつながるのではないかと考え、本研究を進めることとした。

2 研究の計画

(1) 研究体制

各部の教務主任及び授業担当者、各部の代表者で定期的に総合的な学習の時間の授業の在り方について情報交換を行い、協議を深める。本校では、小・中学部が平成12年度から、高等部は平成13年度から総合的な学習の時間を教育課程に位置付けて授業に取り組んできた。文献研究から始まり、指導内容や職員の指導体制も含めて試行錯誤をする中で各部ごとに校内研究の中で独自に実践を進めてきた経緯がある。平成15年度から研究協力校として研究に取り組むに当たり、各部の教務主任を中心に情報交換を行い各部の連携を図るように努めてきており、一層の充実を図る。



(2) 研究内容と手だて

研究の手だてとして、ア 学校としての全体計画の作成、イ 児童生徒の自己評価、ウ 学校における組織マネジメント、エ 実践事例（個別の指導計画との関連）、オ 保護者への理解推進の5点を挙げた。それぞれ具体的な内容は以下のとおりである。

ア 学校としての全体計画表の作成

各部で独自に進めてきた総合的な学習の時間の実施計画や年間指導計画を比較検討し、学校としての全体計画表を再検討することを通して、学校全体での共通理解を図る。

イ 児童生徒の自己評価及び教師の自己評価

児童生徒及び教師による自己評価の在り方について、観点の設定方法や評価の具体的方法等に焦点を当てて検討を進める。

ウ 学校における組織マネジメント

「組織マネジメント」の理念を生かした小規模な取組を行い、そこから得られた成果と反省を整理

する。

エ 児童生徒の実践事例（個別の指導計画との関連）

実践の中で児童生徒を各部で一人ずつ取り上げ、個別の指導計画との関連付けについて明らかにしながら事例研究を行う。その中から、昨年度との児童生徒及び教師の取組の方法や活動の様子の変化を探る。

オ 保護者への理解推進

総合的な学習の時間に関する事柄を保護者懇談会や授業参観の場で知らせるとともに、学校だよりやホームページに掲載することによって理解推進を図り、外部への情報発信及び外部からの評価の機会とする。

3 平成17年度の各部の取組

(1) 学校としての全体計画表の作成

<表3 各部の実践概要>

	対象の類型	学年	授業時数
小学部	・ 類型	3年～6年	41
中学部	類型～ 類型	1年～3年	70
高等部	・ 類型	1年～3年	70
	類型～ 類型		35

- ・ 類型：当該学年の学習内容及び下学年の学習内容を精選して学習する教育課程
- 類型：日常生活に必要な基礎的な知識の習得や技能の向上を図る教育課程
- 類型：生活に必要な基本的動作や身辺処理能力などの習得，コミュニケーションの基礎的能力を身に付ける教育課程

各部の総合的な学習の時間についての実施計画や年間指導計画を比較検討し、学校としての全体計画をまとめた。

小学部では、・ 類型という限られたグループの児童ではあるが、インターネットの利用など初歩的なパソコン導入の機会とし、話し合い活動、調べ学習、体験活動とまとめという一連の流れで繰り返し、学習内容の定着を図る。

中学部では、～ 類型まで参加生徒の幅を広げ、様々な体験活動や調べ学習で外部講師を招いたり、公共交通機関を使った校外学習に取り組んだりして活動を進める。すべての生徒が学年や類型の枠を超えて、生徒同士や多くの教師とかわかるところを目指す。そこでは、小学部で総合的な学習の時間を経験した児童が中学部でのグループ活動の中心的役割を果たす生徒として期待されている。また話し合い活動、調べ学習、体験活動とまとめという一連の学習の流れを「発表」という形に発展させ高等部の実践につないでいく。

高等部は、卒業後の生活を意識して、より実践的な講義や体験活動を類型ごとに積み重ねて「総合的な学習発表会」としてまとめていく。

各部ごとに始まった総合的な学習の時間ではあるが、こうした一連のつながりの中で「生きる力」

を「人とかかわる力」，「ものに主体的にかかわる力」ととらえ，それらをはぐくむものとして学校全体として実践に取り組んでいる。

< 参考資料 1 : 総合的な学習の時間 全体計画表 >

総合的な学習の時間 全体計画表

愛知県立名古屋養護学校

	目 的	I・II 類型	III 類型	IV 類型	備 考
小学部	1 身近な課題に主体的に取り組み、自分らしく問題解決する資質や能力を育てる。 2 自分でできる活動を積み重ねることで生活経験を豊かにし、創造的に取り組む態度を育て、生活に生かせるようにする。	「私たちでできる○○」 オリエンテーション 話し合い活動 調べ学習 体験活動 ↓ まとめ			※I・II 類型のみ3年生以上で実施する。学期ごとにまとめを行う。
中学部	1 自ら課題を見付け、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。 2 自分の様々な能力を知り、自己の生き方を考えることができるようにする。 3 様々な体験をすることにより経験の幅を広げ、感情を豊かにもち、自己表現する力を養う。	「私の将来」、「学習発表会」ほか オリエンテーション 話し合い活動 調べ学習 体験活動 ↓ グループ別活動発表、学習発表会など			※すべての類型で実施する。活動によって学年や類型を超えてグループを編成する。 ※一年間の前半を「私の将来」、後半を「学習発表会」に取り組む。
高等部	1 生徒が自ら課題を見付け、自ら学び自ら考え、問題を解決する力など「生きる力」を育てる。 2 情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決に向けて主体的、創造的な態度を育成する。 3 卒業後の進路を主体的に選択し、生きがいのある生活を実現していくという自己の在り方生き方について考えることができるようにする。	「プロジェクトX」ほか オリエンテーション 講義・話し合い活動 調べ学習 体験活動 ↓	「グループ別プロジェクト」ほか オリエンテーション 話し合い活動 調べ学習 体験活動 ↓	「まとめどり」ほか オリエンテーション 体験活動 ↓	※すべての類型で実施する。活動は類型ごとを基本に行い、内容によっては部や学年全体で行う。 ※「総合的な学習発表会」に向けて一年間を通じて取り組む。
		総合的な学習発表会			

(2) 小学部の取組

小学部では，平成14年度から以下の2点を総合的な学習の時間のねらいとしてきた。

ア 総合的な学習の時間のねらい

身近な課題に主体的に取り組み，自分らしく問題を解決する資質や能力を育てる。

自分でできる活動を積み重ねることで生活経験を豊かにし，創造的に取り組む態度を育て，生活に生かせるようにする。

昨年度は，転入・転出の児童も含め2人で「自分たちでできるスポーツ」のテーマに取り組んだ。本年度は，3人の児童でテーマを「あそび」に決め，児童の興味・関心に基づく活動として調べ学習と体験学習に取り組んだ。活動は，各学期を一応の区切りとし，まとめを行う。

イ 評価の観点

総合的な学習の時間の活動の評価の観点として以下の4点を挙げた。具体的な評価に当たっては，一人一人の児童について，学期ごとに評価をした。グループ全体の児童の活動の様子と成果についてはおおむね以下のとおりである。

「課題に対する主体性」：自分で計画し，積極的に活動するなど，達成度は高かった。

「創造的に取り組む態度」：キーワードを考えて工夫し，インターネットで検索することができた。

「問題解決，情報収集，分析，判断」：話し合いにより，遊び方やルールを考えることができた。

「活動に伴う技能，表現」：実際にゲームを実施し，学習を振り返り，工夫したことや作ったものなどについての発表を行った。

このような評価の観点を確認にすることで，各活動を適切に評価することができ，その後の活動内容の修正に生かすことができた。また，児童の活動の姿をはっきりとらえ，個々の課題が浮かび上がり，適切な支援ができるようになった。

ウ 自己評価と「総合ノート」

小学部では，学習活動を振り返って自分の活動をまとめるため，自分自身を評価する「総合ノート」を活用した。この「総合ノート」には，活動ごとに個々の振り返りによる自己評価欄を作り，「・〇・」の3段階の記号で記入したり，友達の活動でよいと思ったところを文章で書き込んだりできるようにした。使い始めのころは，単語の羅列だけであったり，白紙であったりと文章で表現すること自体が不慣れであることが明らかになった。これまで自己評価をする経験がなく，何をどのように振り返ればよいかわからなかった児童も，「総合ノート」を繰り返し記入することで次第に自分の学習について反省したり，見直したりするよい機会になったと考える。

肢体不自由養護学校小学部の総合的な学習の時間は，障害に伴う体験不足や生活環境に伴う経験の不足を補いながら計画していくことが必要である。自分のよさや自分らしさに気付くためには，体験や経験学習の経過を振り返る活動が不可欠であることも実践により明らかになった。

< 参考資料 2 : 小学部 「総合ノート」児童の記録 >

5月19日(木) 名前()

今日の学習 インターネットでおぼれたことおぼれよう

おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう

今日の学習をふりかえって

自分の活動を評価 すると・・・ その理由は？ よかった点、直したい 点は何ですか？	評価	理由
友達の活動で良いと 思ったところ		
先生より		インターネットをつかっておぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう

5月28日 名前()

今日の学習 昔の遊びでおぼれよう

おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう

今日の学習をふりかえって

自分の活動を評価 すると・・・ その理由は？ よかった点、直したい 点は何ですか？	評価	理由
友達の活動で良いと 思ったところ		おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう
先生より		おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう おぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれようおぼれたことおぼれよう

(3) 中学部の取組

中学部では、平成14年度に総合的な学習の時間の年間指導計画を見直した。一年間の前半を「私の将来」、後半を「学習発表会」という単元を主にして構成し、調べ学習、体験学習、発表活動に取り組んできた。ここでは、「私の将来」の実践事例を中心に評価や個別の指導計画との関連についてまとめる。

ア 総合的な学習の時間のねらい

自ら課題を見付け、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。

自分の様々な能力を知り、自己の生き方を考えることができるようにする。

様々な体験をすることにより経験の幅を広げ、感情を豊かにもち自己表現する力を養う。

以上3点を中学部における総合的な学習の時間のねらいとし、週時程の中で2時間連続で設定する授業を基本に、一部まとめどりとして集中的に取り組む期日を設けた(年間70時間)。また、類型から類型までの全生徒を対象とし、全職員で指導した。

イ 年間指導計画

「私の将来」 : グループ単位

「学習発表会」 : 学年単位

「学年での活動」 : 学年単位

・遠足、野外活動、修学旅行等の事前・事後学習

・卒業アルバムの作成など

「交流活動」 : 単元ではないが、名古屋市立山田中学校との交流や随時行う他校との交流も総合的な学習の時間の中で取り組んでいる。

<表4 平成17年度 中学部の単元計画表>

	単元名	内容	単元名	備考
4月	私の将来	オリエンテーション	遠足事前学習	
5月			遠足事後学習	
6月		まとめどり	野外活動事前学習 修学旅行事前学習	
7月			野外活動事後学習 修学旅行事前学習	
9月	↓	まとめどり	修学旅行事前学習	
10月			社会見学事前・事後学習 修学旅行事前学習	
11月		グループ別活動発表	修学旅行事後学習	交流活動
12月	学習発表会			
1月	↓			
2月	学年活動	学習発表会		
3月	↓			

まとめどり：総合的な学習の時間を特別に時間をとって実施した活動（以下同様である）

ウ 「私の将来」の概要

4月当初のオリエンテーションにより、学年や類型によらず生徒自身の希望を大切にした活動グループを編成している。おおむね ・ 類型を中心とした「生き方探検隊」と ・ 類型を中心とした「豊かな生活体験隊」の二つに大きく分かれるが、グループ分けには、類型による制約はない。豊かな生活体験隊は、更に「食べ物」「車」「ゲーム・あそび」「行き方」「染め物」の活動グループに分かれる。それぞれの活動のねらいは、以下のとおりである。グループ別活動発表のねらいは(ウ)に掲げた。

(ア) 豊かな生活体験隊（35時間）

- ・ 物作りの様々な体験を通して、経験の幅を広げ、人や物とのかかわる力をはぐくむ。
- ・ 卒業後の豊かな生活につながる余暇の過ごし方を探る。

(イ) 生き方探検隊（35時間）

- ・ 卒業後の自己の生き方を探る。
- ・ 社会にかかわる体験や生きがいにつながる体験を通して、自己の生き方や将来について考える力をはぐくむ。

(ウ) グループ別活動発表（2時間）

- ・ 今までの学習活動の成果をまとめ、発表する機会とする。
- ・ 製品や作品の展示、ノートや模造紙等を使った紙面発表等により学習の経過や成果をまとめる力を養う。
- ・ 展示作品を見たり聞いたりすることで、互いに評価し合う。

< 表5 平成17年度 グループ別活動の概要 >

	豊かな生活体験隊					生き方探検隊
	食べ物	車	ゲーム・あそび	行き方	染め物	
主な活動内容 (まとめどり) 6/15 (6時間)	調理実習 (うどん作り)	校外学習 (買い物学習) 車作り	校外学習 (テーマパーク 見学) ゲーム作り	校外学習 (史跡見学) 名古屋名物 しらべ	校外学習 (草花採集) 布の染色 作品作り	電化製品の歴史 (洗濯体験など) 校外学習 (手芸体験) (テーマパーク見学)
生徒数	9	5	7	6	6	8
職員数	8	4	4	4	4	4

(4) 高等部の取組

高等部では、卒業後の進路や生活を考え、類型別学習グループを基に幾つかのグループに分かれ講義や物作り、調べ学習などに取り組んだ。

ア 総合的な学習の時間のねらい

生徒が自ら課題を見付け、自ら学び自ら考え、問題を解決する力など「生きる力」を育てる。

情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決に向けて主体的、創造的な態度を育成する。

卒業後の進路を主体的に選択し、生きがいのある生活を実現していくという自己の在り方

生き方について考えることができるようにする。

イ 活動の概要

指導内容については、生徒の興味・関心から内容を発展させていくことを基本にしつつも、生徒の実態（学習意欲の低迷、生活経験の乏しさ等）から学習意欲の喚起につながる内容や、卒業後を想定した知識や社会常識など（教科で扱わないもの）について、内容を精選して、講義を行う。高等部3年間を見通した単元構想を立案し、今の自分を見つめたり、これからのよりよい生き方を探ったりする学習活動を通して、自ら主体的に学習し、表現する力を養う。まとめとして学習経過及び学習成果の発表として「総合的な学習発表会」を行う。こうした基本的考え方のもとに次のような活動内容で本年度は取り組んだ。

・ 類型：対象生徒4名

- ・ 生徒主体の学習の糧になる講義（私たちの支援費制度、健康と生涯スポーツ等の講義）
- ・ プロジェクトX（生徒が主体的にテーマを決め、体験的な活動を行う。）
- ・ まとめどり（オリエンテーション、施設見学、校内実習、総合的な学習発表会など）

類型：対象生徒26名

- ・ グループ別プロジェクト（生活を豊かにする体験的活動）

学年を超えた、4つのグループ：音楽プロジェクト、スポーツ体験プロジェクト、パソコンプロジェクト、ものづくりプロジェクトに分かれて活動する。

- ・ まとめどり（オリエンテーション、施設見学、校内実習、総合的な学習発表会など）

類型：対象生徒12名

- ・ まとめどり（オリエンテーション、施設見学、校内実習、総合的な学習発表会など）

学年や部全体で活動する「まとめどり」の時のみ参加する。

ウ 評価の観点

高等部における評価は、昨年までの研究により以下のように観点や項目を設定した。実際の評価に際しては、生徒一人一人について観点ごとに具体的に内容を設定する。

課題設定の能力：卒業後の生活を考え、自分たちの身の回りのことから自分で調べたいことややってみてみたいことを見付けているか。

問題解決能力：問題を解決するためにはどうしたらよいのか、自分なりに考えて見通しをもってその方法を工夫することができたか。

情報活用能力：必要な資料や情報を自ら進んで集め、適切な判断のもとに整理することができたか。

コミュニケーション能力：仲間の意見をよく聞き、理解した上で、自分の考えを分かりやすく相手に伝えることができたか。

表現力：情報を集めたり、話し合ったりしてまとめた内容を、他者に分かりやすく発表することができたか。

学習への主体的・創造的な態度：問題発見や学習活動に、主体的・意欲的に取り組むことができたか。最後まであきらめずに追究し、表現することができたか。

自己の生き方を考える力：多様なものの考え方や生き方があることを理解し、学習したことを今後の自分の生活に生かそうとしているか。

自己評価については、評価項目ごとに「・○・・×」など4段階で行い、他者から自分を見直す機会として相互評価も取り入れた。自己評価が厳しい結果であっても他者からの評価が意外にも高

い場合もあり、必ずしも一致しない評価に自分を再発見し自信をつける生徒もいた。

4 研究実践上の困難点と改善の工夫

(1) 研究実践上の困難点

学校における組織マネジメントについて教師間の理解推進が十分に実施できない。

総合的な学習の時間に対する取組が本校のように小学部，中学部，高等部がある場合，児童生徒の実態により教師の取組，活動内容などに差があり，共通理解が得にくい。

年度ごとに教師の異動などにより総合的な学習の時間の継続した指導および研究が困難な場合がある。

総合的な学習の時間だけに絞って，保護者など外部の評価を得ることは難しい。

～ の困難点を考慮に入れ，中学部の総合的な学習の時間「私の将来」の一つのグループ（ゲーム・あそびグループ）の実践の中から生徒及び教師のマネジメントについてP D C Aのサイクルを踏まえながら考察していく。また，保護者の評価についてもグループの生徒の保護者には評価をしてもらうようにする。指導する教師についてもマネジメントの考え方についての共通理解を図る。

(2) 実践事例～中学部「私の将来」ゲーム・あそびグループの実践～

ア 生徒の実態

本グループで活動する生徒は，6人（男子4人，女子2人）である。 類型の生徒が3人， 類型の生徒が3人である。自分の意思（快・不快など）を伝えることはできるが，医療的ケアを必要とする生徒などがいる。障害は重度であるがパソコンやゲームには興味をもてる生徒もいる。また，自分の興味関心のあることには，積極的に自分の意見を発表できる生徒もいる。その生徒を中心に本グループでは活動内容などを考えていった。

イ 校外学習におけるS W O T分析

本校は駅が近くにあり，公共交通機関を利用したの校外活動を実施する上で便利なところに立地している。そこで，指導教員の間で，本校での校外学習におけるS W O T分析を実施し，本グループが公共交通機関を利用して校外活動を行うことについての話し合いを行った。

【校外学習におけるS W O T分析】

<機会（O）>

- ・公共交通機関の駅に近い。
- ・駅にエレベーターなどがあり，利用しやすい。
- ・近所の人たちも障害者に対する理解がある。
- ・学校周辺にコンビニや公園が多い。

外

- ・駅員との連絡がとりにくい場合がある。
- ・歩道等に段差が多く，車いすの生徒には移動が難しいところが多い。

<脅威（T）>



<強み（S）>

- ・校外学習に対して，積極的な教職員が多い。
- ・保護者が協力的で理解がある。

内

- ・事故防止のため，支援する人手の確保が難しいときがある。
- ・生徒の障害が重度化している。（医療的ケアの必要な生徒が増えた）

<弱み（W）>

ウ 活動内容

本グループは、ゲーム・あそびを中心に活動内容を教師が支援しながら生徒が活動計画を考えた。「まとめどり」の時間に愛知万博の関連施設であるデ・ラ・ファンタジアの中にあるポケパークへ行くことを提案し、それに向けての計画を話し合った。インターネットで、交通手段や施設について調べた。それを基に、フラッシュカードを作り、当日の日程や活動などについて計画した。【Plan】

「まとめどり」当日は、事前に学習した交通手段（名鉄・あおなみ線）で、現地に向かった。ポケパークでは、事前に調べたアトラクションやゲームを体験した。外食の体験もできた。【Do】

体験後の授業では、活動の様子の写真を見ながら、当日の活動や体験したことを振り返って、楽しかったことなどの感想を発表しあった。【Check】

「まとめどり」以降の活動についても話し合いを行い、ポケパークで体験してきたゲームを自分たちで作って遊んだり、他のグループの生徒にも体験してもらったりすることになった。どんなゲームを作るかを考え、作り方やそのために必要なものについてインターネットなどで調べることにした。

【Action】

エ 抽出生徒Aの変容について（個別の指導計画との関連）

本校では、平成15年度からすべての児童生徒について個別の指導計画を作成している。ここでは、生徒Aのゲーム・あそびグループでの活動を通してPDCAサイクルと個別の指導計画との関連についての事例を通して検討する。

(ア) 生徒Aの実態

生徒Aは、中学1年の3学期に本校に転入してきた 類型の生徒である。小学校高学年の課題を使って学習している。昨年度は、豊かな生活体験隊のパングループで活動した。パン作りの他に、外人講師との交流やホテルでのランチ体験などの活動を行った。公共交通機関の利用も経験した。今年度は、さらに興味関心の幅を広げるために、昨年とは違うグループで活動することを希望し、昨年の経験を生かしながら、昨年以上に意欲的に活動することができた。

(イ) 個別の指導計画

本校では、「個別の指導計画(実態整理表)」と「個別の指導計画（目標及び評価）」を児童生徒一人一人に作成している。「実態整理表」（参考資料3）は、障害に伴う状況、健康、日常生活動作、感覚・認知、コミュニケーション、全体像、注意事項などの各項目から成り、A4判1枚で3年ごとに書き換えるもので、必要により加筆訂正を担当が行う。「個別の指導計画（目標及び評価）」（参考資料4）では、一年間で達成可能と思われる年間目標、学期内に達成可能と思われる短期目標を保護者の願いを盛り込んで具体的に設定し評価する。 ・ 類型及び 類型については、生活場面、授業場面、自立活動に分けて学期ごとに目標を立て、学期末ごとに評価する。様式はA4判1枚で、作成に当たっては担任が保護者と個別懇談週間中に話し合い、学年職員によるケース会で目標等について検討をする。

総合的な学習の時間については、個別の指導計画の各生徒の実態や短期目標、長期目標及び保護者のニーズを踏まえて、個人目標を設定し、学習の支援を行った。生徒Aの目標も個別の指導計画を考慮に入れて設定して学習の支援を行った。

< 参考資料 3 : 個別の指導計画 (実態整理表) >

個別の指導計画 (実態整理表)

氏 名	○ ○ ○ ○	性 別	
() 年度	中学部	1 年 組	作成者
() 年度	部	2 年 組	作成者
() 年度	部	3 年 組	作成者

特に問題の無い項目は記入の必要なし

障害に伴う状況	首のすわり	障害の状況について記述する。 首のすわり 上肢・下肢の障害の程度 姿勢や動作の様子 (座位が可能, 移動の状況など)
	体幹の保持	
	上肢・下肢機能	
	発声・発語	
	姿勢・動作	
健 康	体温(平熱)	健康状況について記述する。
	呼吸	
	睡眠のリズムと状態	
	発作の有無と状態 ()	
日常生活動作	排泄 ^{はいせつ} :	学校生活における排泄の方法, 食事の様子など日常生活動作について記述する。
	食事 :	
	衣服の着脱 :	
	移動 :	
感 覚・認 知	視 覚	視覚, 聴力の状況について問題があれば記述する。
	聴 覚	
	その他	
コミュニケーション	コミュニケーションに支障があるかどうかなどについて記述する。	
全 体 像 (性格・社会性)		
注 意 事 項	生徒の性格や友だちとのかかわり, 興味・関心の対象などを記述する。	

< 参考資料 4 : 個別の指導計画 (目標及び評価) >

平成17年度 個別の指導計画 (目標及び評価)

氏 名	○ ○ ○ ○	○ 年 ○ 組	作成者	○ ○ ○ ○
年間目標	1 年間に達成可能と思われる目標を具体的に記入する。			
短期目標	1 学 期	2 学 期	3 学 期	
	【目標】 1 学期間に達成可能と思われる短期目標を具体的に記入する。 【評価】 学期ごとの評価を記入する。			

児童生徒の特性・保護者の願い

学習に活かしていきたいよさ (特性) や児童生徒の気持ち	子供のよさ (特性) や保護者の願い等について、実態把握や個別懇談等を通して得た事項を記入する。
保護者の願い	

目標・内容・方法・評価

	生 活 場 面	授 業 場 面	自 立 活 動
1 学 期	【目標】	【目標】	【目標】
	(目標) 短期目標を受けて、1 学期間に達成可能と思われる重点目標を一つに絞り、具体的に記入する。		
	【内容・方法】		
2 学 期	【評価】	(内容・方法) 短期目標達成のための指導内容・指導方法について具体的に記入する。	
	(評価) 目標の達成状況や1 学期間の学習状況について保護者 (子供) と共に評価を行い、記入する。併せて次学期の計画に生かす。		
	生活場面と授業場面の幅は必要に応じて変更する。		
3 学 期	1 年間の目標達成状況や1 年間の学習状況について保護者 (子供) と共に評価を行い、記入する。併せて次年度の計画に生かす。		
次年度に向けて			

(ウ) まとめ

生徒Aは、目標として「最後まで一生懸命に取り組む」、「自分でその問題を考えて、みんなと相談して問題を解決する」などを挙げていた。個別の指導計画にある保護者の願いや短期目標について、生徒A自身の自覚はあまりない。しかし、教師は、個別の指導計画の目標などを踏まえて指導に当たっている。

個別の指導計画については、紙面に限りがあり、総合的な学習の時間そのもののねらいは記載していない。しかし、担任や授業者はAについて「3年生になって積極性が出てきており、総合的な学習の時間で、自分の意見をしっかり発表し意欲的に活動している」と指摘している。総合的な学習の時間でのねらいが「私の将来」という单元だけで達成されたとは言えないだろう。しかし、生徒Aにかかわる様々な教師の働き掛けが、結果として生徒Aの目標に向けて取り組む姿勢や自分についての評価に反映していると考えられる。

生徒Aは、昨年度までは、欠席がちで、学習の積み重ねが難しい生徒であった。しかし、今年度は、欠席することが少なくなり、何事にも意欲的に取り組む姿勢がみられるようになった。特に、総合的な学習の時間は、ほぼ毎時間出席し、ゲーム・あそびグループのリーダーとして、校外活動の計画などを話し合う時には、率先して意見を出し意欲的に活動することができた。

オ 考察

本グループの生徒の実態を踏まえながら、生徒の興味・関心を引き出し、生徒が活動に対する充実感や達成感を味わうことができるための支援の方法について教師間で共通理解を図った。

本グループの活動では、校外学習としてポケパークへ行くことが決まり、生徒や保護者ともに理解を得ることができた。校外活動に出掛けることを目標に、意欲的に生徒も調べ学習などに取り組むことができた。重度障害の生徒も教師と一緒に作業などの活動を行うことができた。

活動内容も、計画【P】、実施（実践）【D】、評価【C】、更新（新たな活動）【A】のサイクルの中で行うことができた。

評価については、生徒の連絡帳や保護者との懇談などを通して、保護者の思いや総合的な学習の時間への関心の度合いを知ることができた。しかし、生徒の自己評価については、知的な障害があるため十分な評価を得ることはできなかったので適切な評価方法を検討していく必要がある。教師間の評価については、評価の観点が不明確なところもあり、この点についても今後の課題として検討していきたい。

5 成果と課題

(1) 学校としての全体計画表の作成

各部の総合的な学習の時間についての実施計画や年間指導計画を比較検討し、さらに本校としての全体計画を再検討してその結果をまとめた。各部ごとに始まった総合的な学習の時間ではあるが、ともに話し合い活動、調べ学習、体験活動を中心にまとめや発表に取り組んでいる様子が再確認できた。総合的な学習の時間では、学校全体として「生きる力」を人とかかわる力や支えられる力、ものに主体的にかかわる力をはぐくむものとして授業実践してきたと言える。今後もこうした発展的な実践を職員の共通理解のもとに継続し、更に詳細な全体計画の検討や部ごとに行っている評価方法を整理していく必要がある。

(2) 児童生徒の自己評価

児童生徒による自己評価の在り方について、観点の設定方法や評価の具体的方法等に焦点を当てて検討を進めてきた。小学部の実践のように「総合ノート」の活用は、児童生徒にとって学習活動の振り返りの大変重要な手掛かりとなった。また、中学部では、評価試案の中で生徒と指導者による話し合いで評価項目を設定する取組がなされた。高等部では、さらに自己評価や他者評価あるいは相互評価に取り組んだ。こうした取組は、今後も継続して取り組むことによって児童生徒の間に定着していくきざしが各部の実践からうかがうことができる。学校全体として障害の重い・類型の生徒については、シンボルマークの活用などさらに工夫の余地がある。

(3) 個別の指導計画との関連 - 実践事例より -

中学部全体の総合的な学習の時間の取組の中で、組織マネジメントの理念を各教師に浸透させて、指導につなげることは難しい。各グループの生徒の実態も違い、教師の取組の方法、活動内容などに差があり、共通理解が得にくい。しかし、本事例では、生徒及び教師の活動に向けての取組の中で、Plan - Do - Check - Actionのサイクルを踏まえて、活動内容などを生徒を支援しながら考えた。PDCAのサイクルを意識して活動することで活動を振り返ってよりよい活動を考えることができた。

中学部の実践の中で事例となる生徒を取り上げ、個別の指導計画との関連付けについて明らかにした。本事例では、・類型の生徒が対象であるため観点ごとに目標を設定し、自己評価することは難しかった。しかし、授業ごとに活動を振り返って評価することはでき、次の活動へつなげることができた。一方、本校では、保護者への提示を前提にした分かりやすい個別の指導計画の作成を心掛けてきた。したがって、文書量として余力がなく、総合的な学習の時間のねらいを明確な文章として個別の指導計画の中に表記することが現状では難しかった。今後も個別の教育支援計画の作成検討へと進める中で、総合的な学習の時間の評価の位置付けや関係について整理していく必要がある。

(4) 保護者への理解推進

総合的な学習の時間に関する事柄を保護者懇談会や授業参観の場で知らせたり、学校だよりへの掲載やホームページへの登載をしたりするなどにより理解推進を図り、外部への情報発信及び外部からの評価の機会としてきた。

小学部の保護者からは、「一人で行っているのはとても寂しい。しかし、その分、一人だと自分のやりたいことを決めてでき、時間もかけられると思うので、将来に向けて役立つことを学べるといいと思う」との感想が寄せられた。

中学部では、総合的な学習の時間について、「普段の授業の様子と違い、こだわらず活動できていた」、「ポケパークでの活動が楽しかったよと家でも話してくれました」、「(公共交通機関を使った校外学習に出られて)遊具や外食ができてよかった」などの意見が寄せられた。

高等部では、「自ら考え、自ら質問して、自ら進めていく。自主性を養うのには親として、とてもありがたいと思っています」、「学校の外に出て(コンビニへと)自分の力、勇気を確かな心の支えとなり、『自信』とつながる授業の時間は大変に喜ばしく、親子共々うれしいと感じさせていただいております」などの意見があった。

ここに紹介した意見・感想は、総合的な学習の時間の実践に対する保護者からの評価であると考えられる。しかし、意見・感想は、ごく一部の保護者から得られたものである。多くの保護者が総合的な学習の時間の主旨を理解し協力してもらえるような働き掛けを工夫していく必要がある。

以上(1)～(4)の4つの観点を研究内容の柱としたものの、各部とも今までの研究や実践の経緯があり、全体として細かなところまで十分に打ち合わせて統一的な研究に取り組むことは難しい面も多かった。評価については、更に本校の障害の重い児童生徒の実態に合わせて再考する必要がある。しかし、それぞれの部で工夫した自己評価の在り方、保護者理解のための働き掛けなど実情に合った研究が進められたと考える。

児童生徒が、卒業後に必要とする「生きる力」を本校では、人とかかわる力ととらえてきた。自分から主体的にかかわることを増やし、様々な場面で周りの人に自分の意思を正しく伝えることができることは大切な力だと考えた。本校では、各学年の人数や実態にばらつきが大きく、毎年指導計画や指導体制を見直しながら進める必要がある。今後も総合的な学習の時間において、計画【P】、実施（実践）【D】、評価【C】、更新（新たな活動）【A】のサイクル化を目指し実践を重ねていきたい。